

お酒の楽しみ

AtoZ

vol.04



にいがた美醸 主宰
村山 和恵

PROFILE

村山 和恵 (むらやま かずえ)

秋田生まれ新潟育ち。短大で教員を務めるかたわら、日本酒好きなのが高じて資格を取得し、講習会やイベント、執筆に関わるほか、日本酒の楽しさを多くの女性と分かち合いたいとの思いから、2009年から女性のための日本酒コミュニティ「にいがた美醸」を主宰している。2013年よりにいがた観光特使、2014年には女性としては新潟県初の「酒サムライ」に叙任。2020年に小笠原流礼法の師範を取得するなど、活動の幅を広げている。

にいがた美醸ウェブサイト

<http://www.niigatabijo.com/>

村山和恵ブログ～酒サムライ・かずえの日本酒一合一会

<https://ameblo.jp/love-ricewine/>

何故わたしたちは酒を飲むのか？

嗜好品である酒

生命維持には直接関係するものではないが、風味や摂取時の心身の高揚感、味覚や嗅覚を楽しむために飲食される食品・飲料や喫煙物のことを総称して「嗜好品」と呼んでいます。日本酒を含むアルコール飲料も、この「嗜好品」の仲間なのですが、生命維持には直接関係を持たないということは、「酒を飲まなくても生命維持ができる」ということです。そう考えたとき、私は「酒を飲まなくても、生命維持はできるかもしれないが、心が死んでしまうのではなかろうか」と、思いました。

アルコール飲料は世界各地で独自の歴史文化を形づくり、人々とともに現代まで歩みを進めています。日本酒においても、神に捧げる神聖なものというルーツに始まり、時代によって多様な楽しみ方を経て、長い歴史を紡いでいます。嗜好品であるのに、むしろ飲みすぎると健康を害してしまうかもしれないのに、なぜここまでの歴史を持ち、人々に愛されているのでしょうか？

今回はそのようなことを考えながら、タイトルのテーマで展開してまいりたいと思います。

酒を飲む目的

小さい頃、祖父や父親が美味しそうに飲んでいた酒（ビールや日本酒）を、「そんなに美味しいのか

な？」というので、ペロッと舐めたことがありました。そのとき、「どうして大人はこんな苦くて美味しくない物を飲むのだろう！？甘いジュースのほうがよっぽど美味しいのに！」と、思ったものですが、現在、私がお酒を嗜む大人になって、あらためてお酒を飲む目的を考えると、お酒の香味^{たしな}ということを超えた「なにか」があるからなのだろうと思います。

お酒に限ったことではないのですが、人が何らかの製品を消費する（しようとする）とき、製品自体に魅力を感じているということもありますが、加えて製品の持っている機能がもたらしてくれるメリットや、消費する（している）ことによりもたらされ





る心地の良い体験を手に入れたいからというのが大きな動機となるでしょう。

そこで、私なりにお酒を飲む目的なるものを考えてみました。「お酒が好きだから」といったように「お酒を飲む」こと自体が目的ということも大きいかと思いますが、「お酒が好き」という気持ちは、お酒を飲むことによる心地の良い体験やメリット、お酒がある場での楽しい経験が、そのような気持ちを形作っていると思います。以下に具体例を挙げてみました。

- ① 酔うことによる気分の高揚感
- ② 酔うことによるリラックスした気分
- ③ ストレス解消
- ④ 人との楽しいコミュニケーション
- ⑤ 料理がより美味しくなる

また、ある研究によれば、人が何らかの行動を起こすとき、その背後にある動機として「社会性動機」（例：他者と仲良くなりたい）、「対処性動機」（例：むしゃくしゃしたことがあり、気分を晴らしたい）「気分高揚動機」（例：楽しくなりたい。ハイな気分になりたい）があると仮定しているそうです。なるほど、「お酒を飲む」目的として、概ね合致していますね。

◆ 今日飲みたい気分なの

というセリフをどのようなトーンで言い放つのかにもよりますが、ドラマや演歌や歌謡曲の香が漂っているような気がするの私だけでしょうか。おそらくこの言葉の背景には、何か気分が落ち込むようなこと、ネガティブな要素が起こったから、飲んで忘れてしまいたいという気持ちがあるのかもしれない。ちなみに、このような状況のときは「飲まない」とやっていたらいい！というセリフも存在しているかと思います。また、嬉しいことがあったから、パーっと飲んで更に気分を盛り上げたいということもあるでしょう。日常生活の中における、喜怒哀楽の振りがいつもより大きかった、そうなるようなことが起きたとき、「飲みたい気分」になるのでしょうか。

◆ 喉と心を潤す存在

人々とともに長い歴史を歩んでいるアルコール飲料。なぜ飲むのかという問いに対しては、それぞれの飲み手が状況に応じて、異なる答えを持っていることでしょう。

けれども、私がこれまで日本酒を含むアルコール飲料を、楽しいとき、悲しいとき、腹立たしいとき、嬉しいとき、あらゆる状況下で嗜んできて思ったことは、やはり“お酒は喉とともに、心を潤してくれる愛おしき存在である”ということです。

